

ドイツ語教室の海外交流

大阪大学外国語学部ドイツ語教室

濱田洋輔*, 酒詰悠太**, 北岡志織***



海外交流

大阪大学外国語学部ドイツ語教室では多岐にわたる海外交流を実施している。以下では1) それぞれの教員による海外交流と2) 学生による海外交流を近年のものに限って紹介する。

1)

北岡 (現代ドイツ文学・演劇) は2022年6月に上智大学で開催されたエキゾチズムと表象に関する国際シンポジウム "Exotismen in der Kritik" に参加し、現代ドイツ演劇における難民表象についての研究発表を行った。この成果は翌年 Brill 社より、論集 Mechthild Duppel-Takayama, Rolf Parr und Thomas Schwarz(Hg.) "Exotismen in der Kritik" Series: Szenen/Schnittstellen, Bd.11, の一編として出版された。また2024年4月には、大阪大学豊中キャンパスで開催された阪神ドイツ文学会シンポジウム "Martin Buber, das dialogische Prinzip und das moderne Individuum in der Literatur" の開催に企画幹事として関わった。加えて2025年の4月には大阪大学中之島センターで開催された文字と文学、芸術に関する国際シンポジウム "Die Schreibszene zwischen Schrift und Graphismus" に参加し、表現主義芸術家ローター・シュライアーと彼の戯曲執筆についての研究発表を行った。

酒詰 (現象学・存在論) は関西ハイデガー研究会 (第104回研究会、2025年3月) にて、Christopher

Fynsk 氏 (Professor of Philosophy, The European Graduate School President (スイス)) の近著 "Heidegger's Turn to Art: The Uses of Rhythm" に基づく講演を開催した。酒詰は関西ハイデガー研究会の運営に関わっており、今回も Fynsk 氏が来日する以前より Eメールで連絡をとるなど実務を担当した。当日は、英語での講演であったが、内容が20世紀ドイツの哲学者マルティン・ハイデガーの研究論文であり、また Fynsk 氏の学問的バックグラウンドがモーリス・ブランショやジャック・デリダという戦後フランスの哲学者ないし思想家であるということもあり、英独仏三カ国語で議論が交わされた。講演会の後には懇親会を開催し、スイスははじめヨーロッパでの大学のあり方や、アメリカ合衆国の政治的な現状など、哲学以外の事柄についても盛んに議論した。そのなかではまた、Fynsk 氏が近く交際したデリダとの、氏ならではのエピソードを伺うこともでき、来日したからこそ接することのできる、貴重な知見を得る機会となった。なお、今回の研究会・懇親会には大阪大学文学部・大学院人文学研究科招聘研究員 (「カントおよびヘーゲルの法・政治哲学」に関する研究) として現在大阪大学に滞在している張竣豪 Chang Jun-ho 氏 (Professor, Department of Ethics Education, Gyeongin National University of Education 韓国) も参加したことをここに明記しておく。

進藤修一 (ドイツ現代史) は、2024年11月に箕面キャンパスで東アジアのドイツ史研究者の交流を目的としたワークショップ "Der Sinn und die Bedeutung der historischen Deutschlandforschung in Ostasien" を開催した。これは大阪大学台湾研究講座の支援によるもので、姚紹基 Yao Shao-Ji 副教授、陳致宏 Chen Huh-Cheng 助理教授 (国立政治大学・台湾) による研究報告が行われ、全鎮晟 Chun Jing-Sung

* Yoshuke HAMADA

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻・外国語学部 准教授

** Yuta SAKAZUME

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻・外国語学部 助教

*** Shiori KITAOKA

大阪大学大学院人文学研究科外国学専攻・外国語学部 准教授

教授(釜山教育大学・韓国)、中田潤教授(茨城大学)、ドイツ語教室学生が議論に参加した。また、このワークショップは2025年4月に韓国・ソウルで開催された「東アジアドイツ史会議」のプレイベントでもあった。この会議は韓国ドイツ史学会の主催で大阪大学の学術交流提携先でもある高麗大学で開催された。この会議にはドイツ、韓国、台湾、日本から多くの研究者が参加し、進藤が基調報告を行った。

濱田(哲学・倫理学)は、ドイツ総領事館開設150周年を祝して2024年6月に大阪(新大阪ワシントンプラザホテル)で開かれたDAADの奨学生・元奨学生の交流イベント(DAAD-Austauschtreffen in Kansai、基調講演は京都大学・村川泰裕教授)に参加し、文系理系を問わず、ドイツ人研究者やドイツと深いかかわりを持つ日本人研究者、DAAD関係者らと交流を深めた。

ギド・ラッペGuido Rappe(哲学・現象学)は、その著作"Atmosphärische Führung: Stimmungen wahrnehmen und gezielt beeinflussen"(Carl Hanser Verlag、2018年刊行)の共著者であるドイツ・ハーゲン通信大学のクリスティアン・ユルミ私講師と研究連携を進め、2022年には同私講師の本学における研究滞在の引き受け教員となった。その際、同私講師は教室メンバーである濱田、進藤とも研究や学術交流の可能性についての意見交換を行なった。

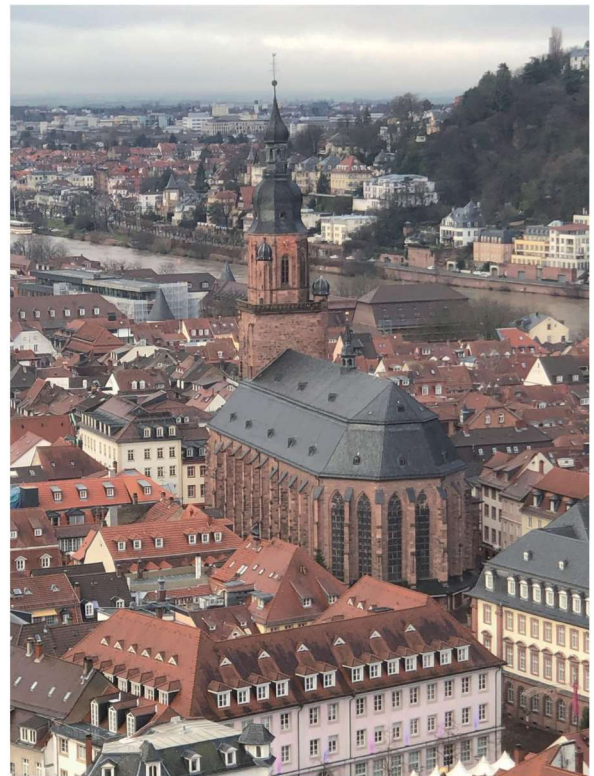
2024年10月にはStefanie Settele氏(元Goethe Institut Osaka講師、外国語学部ドイツ語非常勤講師)主宰のドイツとヨーロッパ文化に関する催し「Wein schmeckt fein!」(ワイン収穫祭)に酒詰と濱田が参加し、多数の日本在住ドイツ人、フランス人、スイス人、韓国人などと交流した。またこの催しは学生にも通知され、ドイツ語学科に所属する学生も参加し、教室の外での生きたドイツ語を体験し、外国語でのコミュニケーションを実践する有意義な機会となった。

2024年11月14日には本学学術交流提携先であるドイツ・ハンブルク大学国際部のGero Hemker氏が当研究室を訪問し、午前中は上記ワークショップ"Der Sinn und die Bedeutung der historischen Deutschlandforschung in Ostasien"参加者と、午後は進藤、濱田、北岡、酒詰と国際交流・大学間交流の現状とこれからの可能性について意見交換を実施した。午後の話し合いでは、両大学の学生間でより活発な

交流が行えるよう模索したいということで意見が一致した。

2)

ドイツ語・ドイツ(語圏)文化を研究と学びの中心とする本専攻では、各学年のおおよそ半数(20名弱)がドイツおよびオーストリアのさまざまな大学(ハイデルベルク、ハンブルク、ミュンヘン、フランクフルト、ビーレフェルト、アウグスブルク、ウィーンなど)に留学している。そこで学生らは、ドイツ語を学ぶと同時に大学の講義を受けるのはもちろん、ドイツ人をはじめとした世界各国の若者と交流し、国際感覚を養っている。留学から帰った後も多くの学生はそこで知り合った海外の友人らと連絡を取り合っており、引き続き活発な国際交流を行っている。



ハイデルベルク城から旧市街を望む

ハイデルベルク大学は大阪大学の学術交流提携校の一つで、1386年に創立されたドイツ最古の大学である。マックス・ウェーバー(社会学)、ヘルマン・フォン・ヘルムホルツ(物理学)、ロベルト・ブンゼン(化学)がかつて教鞭をとり、ノーベル賞を受賞した同大学関係者は56名に上る世界屈指の研究大学となっている。ドイツの古い大学に典型的なつくりで、いわゆる「キャンパス」はなく、旧市街に大学の施設が点在している(新市街にのちに建てられた新キャンパスは存在する)。大阪大学からもたくさんの学生が留学先に選んでいる。

当教室所属の大学院生としてドイツ留学（マインツ、ハンブルク）を行うものもあり、その学生たちはそれぞれの分野で（歴史学、哲学）より専門性の高い国際交流を行っている。また、ここ最近は二年に一人程度の割合で、ドイツ（DAAD）、オーストリア（OeAD）、日本政府（JASSO）などの奨学金支援を受けてドイツ（ハイデルベルク、フライブルク、ビーレフェルト、ボーフム）やオーストリア（ウィーン）の大学院へと進学する学生が出て来ている。

学部生に話を戻せば、2024年の春には、兵庫県教育委員会事務局人権教育課の実施する「子ども多文化共生サポーター（ドイツ語）」に学生が応募し採用された。当学生はドイツ語圏出身の修学児童が日本で円滑に生活し日本語で教育を受けるための支援を、姫路市や芦屋市で実施している。同じく2024年春から、守口市在住の、外国にルーツを持つ子供たちが、自身のルーツにかかわることばや文化を学ぶプロジェクト「守口市ワールドクラス」に複数名の学生が参加している。ここでは遊びを通じて、本専攻の学生たちが幼少期にドイツ語圏の国から日本に移住した子供たちにドイツ文化やドイツ語を学ぶためのサポートを行っている。

また大阪・関西万博に関連したところでは、音楽を通じた国際交流をモットーに、万博での出展を目指す学生団体 "a-tune" に当専攻の学生が副代表として参加している。2025年の9月には世界の様々な国の学生が参加するオンラインオーケストラ e-Symphony の開催を予定している。

このように学外でのドイツ人（やその他の外国人）

との交流の他に、学内では、2年生以上の複数の学生が当専攻で学んだドイツ語を活かして、ドイツ語圏からの留学生の生活をサポートするチューターとして活躍している。また、授業外でドイツ語会話スキルを高めるために、2年生以上の多くの学生がドイツ語圏からの留学生とペアを組み、互いの母語を教え合う「タンデム学習」を行っている。それは語学学習のためだけではなく、互いの文化理解のための良い機会となっている。

学内の海外交流としては、毎年11月末に開催される大阪大学外国語学部語劇祭（各専攻がその専攻語で演劇を行う催し）も挙げられる。外国語学部の多くの専攻が2年生のクラス単位で参加する中、ドイツ語専攻は結成以来1年生から4年生までの有志が参加し、学生自身が脚本や演出も手掛けている。昨年はワーグナーのオペラ『さまよえるオランダ人』をパロディ化し、現代にタイムトリップした「オランダ人」が多様性や現代ドイツの抱える社会問題を学ぶという斬新なオリジナルストーリーを上演した。ドイツ語圏出身の人々も観劇に訪れ、高い評価を頂いた。

最後に、当教室の学生がドイツと近い言語を持つオランダの学生とも持続的な交流を行っていることを付言しておきたい。これまで多くのドイツ語専攻の学生が一オランダのグローニンゲン大学と大阪大学の学生が様々な社会問題について議論し合う「日蘭学生会議」に参加してきた。両大学の学生は、オランダと日本の両国での合宿や会議を通じて継続的に交流を深めている。

